新富町文化財調査報告書第12集

新富町内遺跡発掘調査概要報告書

湯之宮（ゆのみや）遺　　跡
隅ケ迫（すみがさこ）横穴墓群
南　　原（みなみばる）ベニガラ工房跡

1991.3

宮崎県児湯郡 新富町教育委員会

序

新富町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて、平成２年度、湯ノ宮・精曽・湯風呂・五反丸地区県営農村基盤総合パイロット事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。併せて、隅ケ迫横穴墓群・南原ベニガラ工房跡の確認調査も行いました。本書はその概要報告です。

湯ノ宮地区遺跡の調査では、中世における住居と水田耕作に伴うものと考えられる溝条遺構が検出され、また、弥生時代後期の住居跡も確認され、遺跡の空白地帯における貴重な資料となりました。

発掘調査に際しましては、宮崎県一ツ瀬土地改良区、工事業者である㈱富岡建設、㈱河北工務店、宮崎県農業開発公社など始め、地元町民の皆様の御理解とご協力を頂き、ここに心から御礼申し上げます。

平成３年３月

新富町教育委員会
教育長　小　田　幸　一

例　　言

1. 本書は、湯ノ宮地区ほかの県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、平成２年度に実施した湯ノ宮地区遺跡と民間開発に伴う隅ケ迫横穴墓および南原ベニガラ工房跡の確認調査の概要報告書である。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体		新富町教育委員会
教育長		小田幸一
社会教育課	課長	新名正坦
	係長	斉藤久明（事務担当）
	主事	有田辰美（調査担当）
宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係	主事	東　憲章（隅ケ迫横穴調査担当）

調査指導・協力

福岡市埋蔵文化財センター	本田光子
日南市教育委員会	岡本武憲
川南町教育委員会	島岡　武

3. 本書の執筆・編集は有田が行った。

本 文 目 次

第１章　湯之宮地区遺跡 …… 1
調査に至る経緯
立地と環境
調査の概要

第２章　隅ヶ迫横穴墓群 …… 6
調査に至る経緯
立地と環境
調査の概要

第３章　南原ベニガラ工房跡 …… 9
調査に至る経緯
立地と環境
調査の概要

挿 図 目 次

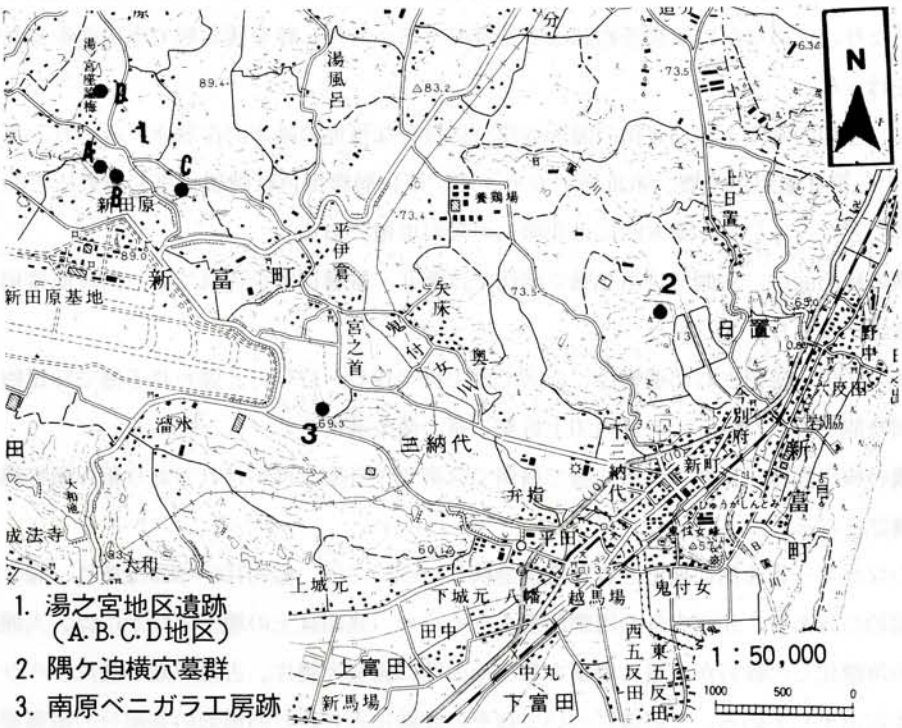
第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　湯之宮地区遺跡Ａ地区遺構配置図 …… 3
第３図　〃　Ｃ地区１号住居址実測図 …… 5
第４図　〃　Ｃ地区１号住居出土土器実測図 …… 5
第５図　隅ヶ迫横穴墓群位置図 …… 6
第６図　〃　６号横穴墓実測図 …… 7
第７図　〃　１号横穴墓実測図 …… 7

第１章　湯之宮地区遺跡

＜調査に至る経緯＞

平成２年度、新富町内で宮崎県一ツ瀬土地改良事務所が事業を計画した湯ノ宮地区、溜水地区、精曽地区の埋蔵文化財について県教育庁文化課に照会があり、文化課では、事業予定地内の埋蔵文化財についての試掘調査および分布調査を実施した。その結果、湯ノ宮地区のＡ・Ｄ地区の一部および溜水地区、精曽地区に遺物（土器）の散布が認められ、遺跡の存在が予想されていた。この内、溜水地区については、諸般の事情により事業が延期され、新たに湯風呂地区、五反丸地区の事業が追加された。

県教育庁文化課、県一ツ瀬土地改良事務所、一ツ瀬土地改良区、新富町教育委員会、町耕地課と事業予定地内に所在する埋蔵文化財について協議した結果、精曽地区については遺跡の所在する部分が地主側の要望等により、遺構を痛める面工事が行われないことにより、遺構の保存が確保された。その他については、工事立ち会いにより、確認することになった。また、あわせて湯風呂地区、五反丸地区についても部分試掘を含め、工事立ち会いにより確認することにより、発見にあわせ協議することとなった。残る湯ノ宮地区については遺構の所在が予想されたＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区については、現状保存が困難な部分について、全面発掘することとなった。



第１図　遺跡位置図

＜立地と環境＞

本年度、調査対象地である湯ノ宮・精曽・湯風呂・五反丸の各地区および湯ノ宮地区遺跡は新富町大字新田（にゅうた）に所在し、宮崎平野に広く、発達している洪積台地の内、高鍋町と新富町の間の通称新田原台地、地形区分でいう新田原面を大きく、東西に開析する鬼付女川に発達する河岸段丘面に立地する。この段丘は大きく二つに分けられ、標高約40mのⅠ面と標高約58mのⅡ面がある。湯ノ宮地区遺跡は大字新田（にゅうた）字湯ノ宮に所在し、このうちA・B・C地区は河岸段丘Ⅰ面に、D地区は河岸段丘Ⅱ面に立地している。なおA・B・D区とC区の間には、鬼付女川の支流が河岸段丘Ⅰ面とⅡ面を切る形で南に流れる。

周辺には、国指定天然記念物「湯ノ宮座論梅」があり、その南側には、近世、実知寺のあった湯ノ宮神社が鎮座している。この「湯宮」は建久図田帳に安楽寺領（太宰府）とされ、古代から中世において特異な位置にあり、関連の遺構が予想されている。埋蔵文化財については、縄文時代早～前期の集石とおもわれる焼石が採集されているが良好な遺跡が確認されていないため、遺跡の空白地帯となっている。

＜調査の概要＞

湯ノ宮遺跡A地区

調査区は、河岸段丘Ⅰ面の部分のうち北側を小さく開析され、東にのびる舌状地形を呈する部分にあたり、このなかに比高差約40cmで三段の水田があり、畔を残す形で水田面を全面的に表土剝ぎを行った。

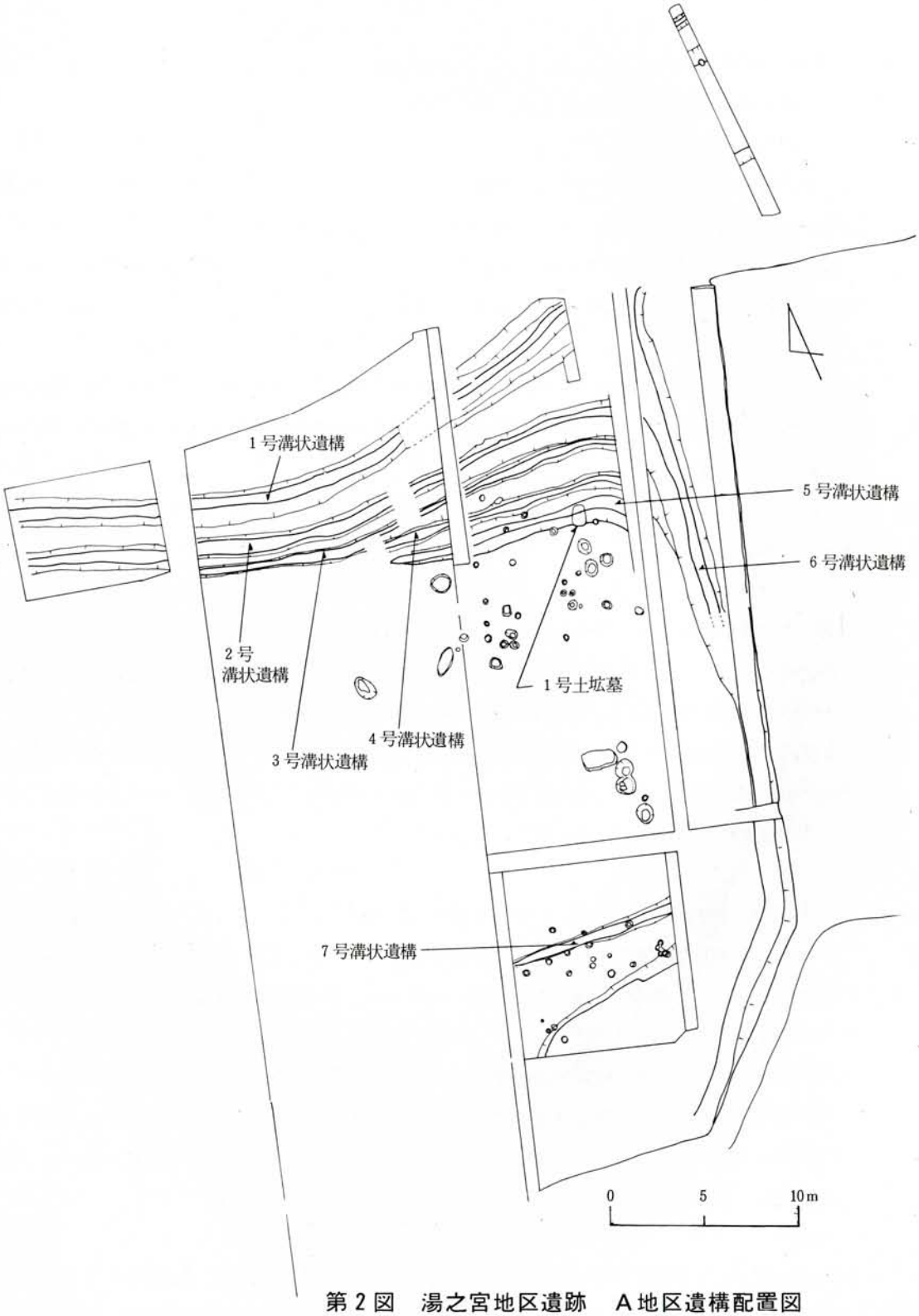
なお、当地の基本土層は北側の開析谷部分に良好な当地の基本的な層序がみられ、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層橙褐色砂礫層、第Ⅴ層青灰色泥岩層（宮崎層群）となっている。基本的には北側への傾斜堆積である。

遺構の検出面は、北側では第Ⅱ層で南側では第Ⅱ・Ⅲ層は削平されており第Ⅳ層橙褐色砂礫層での確認となった。

調査の結果、確認された遺構は、A区では中世（13C～17C）と思われる掘立柱建物1棟、および同時期と思われるピット群約50土坑墓1基、溝条遺構7条、などである。

遺構の検出面は、北側では第Ⅱ層で南側では第Ⅱ・Ⅲ層は削平されており第Ⅳ層橙褐色砂礫層での確認となった。

このなかで一番北側に検出された溝状遺構6については、幅約150～250cmあり、深さ約80cm、溝底幅約45cmあり、10cm内外の円礫が敷きつめられ、底面直土の埋土のなかには、人頭大の礫をはじめ角礫化した砂岩が大量に廃棄され、その間に備前大甕片、古瀬戸壷の破片、ヘラ切り底の土師片が出土している。この溝についてはその北隣に入り込む旧地形の谷部分の最奥部より引か



第2図　湯之宮地区遺跡　A地区遺構配置図

れた水田耕作のための用水路とおもわれ、あわせて南側に所在したとおもわれる住居部分との区画として使用されてたことが考えられる。

Ｂ地区

当地の基本土層はＡ地区とほぼ同じで第Ⅰ層表土（耕作土）の撤去後確認面のほとんどが第Ⅳ層橙褐色砂礫層で東側鬼付女川支流に向けての傾斜堆積である。

調査の結果、近世の陶器片が採集されたものの遺構は検出出来ず、風到木の痕跡が１ケ所認められたのみで、近代以降、開墾による改変のあとが確認されたのみである。

Ｃ地区

当地の基本土層は第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層明褐色ローム層となっている。ほぼ水平の堆積である。遺構の検出面は、第Ⅱ層黒色土層が薄くすべて第Ⅲ層アカホヤ層上面で行った。

Ｃ地区では、弥生時代後期の竪穴住居が１軒、溝状遺構１条（近代～）でこの他にピット等はほとんど認められなかった。

＜１号竪穴住居＞

湯ノ宮遺跡Ｃ地区検出の弥生時代後期の１号住居は、ほぼ主軸を東西にもつ長方形プランをとり西側壁面のほぼ北半分については約50㎝拡がっており、当初よりの掘り込みなのか、拡張なのか不明である。東西約650㎝、南北458㎝で床面積約30.33㎡を計る。

住居内部の床面については、あまり踏み締まった状態ではなく、その中央部および西側部分に僅かに焼土面が認められ、土器の出土状況とあわせてかろうじて床面と認められた住居跡であった。柱穴は主軸方向に２つ認められた。

＜遺　物＞

未整理の段階であるがＣ区の１号住居に特徴的な資料があるので紹介しておく。（第３図１）

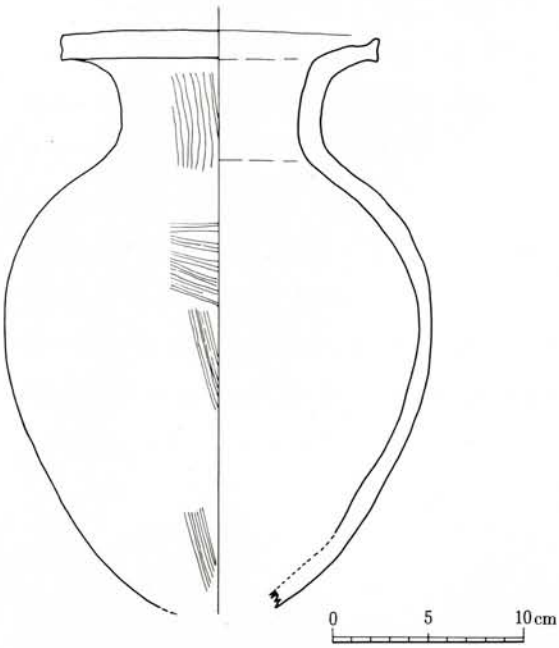
１は、１号住居の東側壁下に横に倒れた状態で出土した壷で底部および胴部の一部を欠くがほぼ完形品である。この壷は、復元口縁径22.0㎝を計り、胴部最大径を中位よりやや上にもち、31.5㎝を計る。

口縁が胴部径より小さい短頸の壺形土器。口縁および胴部外面は右下がり方向にハケ目が認められ、頸部は縦方向のハケ目で仕上げている。口縁端部はヨコナデ仕上げ。胎土には２～３㎜の砂粒を多く含む。焼成は良好であるが２次焼成のため脆い。内外とも浅い黄橙色を呈し、一部、２次焼成のため赤橙色を呈す。

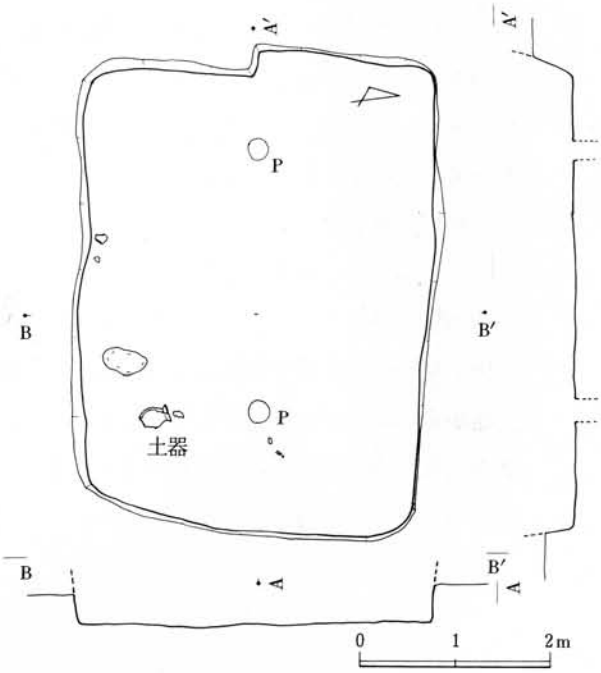
Ｄ地区

当地の基本土層は良好な当地方の基本的な層序がみられ、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層明褐色ローム層となっている。遺構の検出面は、第Ⅱ層黒色土

のほとんどない北側では、第Ⅲ層アカホヤ層上面で行い、第Ⅱ層黒色土が厚く堆積する南側では黒色土上面での確認となった。検出された遺構は、南北に時期不明の溝状遺構1が走り、それに直交し、切る形で新しい溝条遺構2（近代以降？）が検出されている。これより南側では、溝状遺構1にほど直角に同時期の溝状遺構3が流れ込む。出土した遺物は、耕作土廃土中で採集された土師片と近代の陶器片のみであった。



第3図　C地区1号住居址実測図



第4図　C地区1号住居出土土器実測図

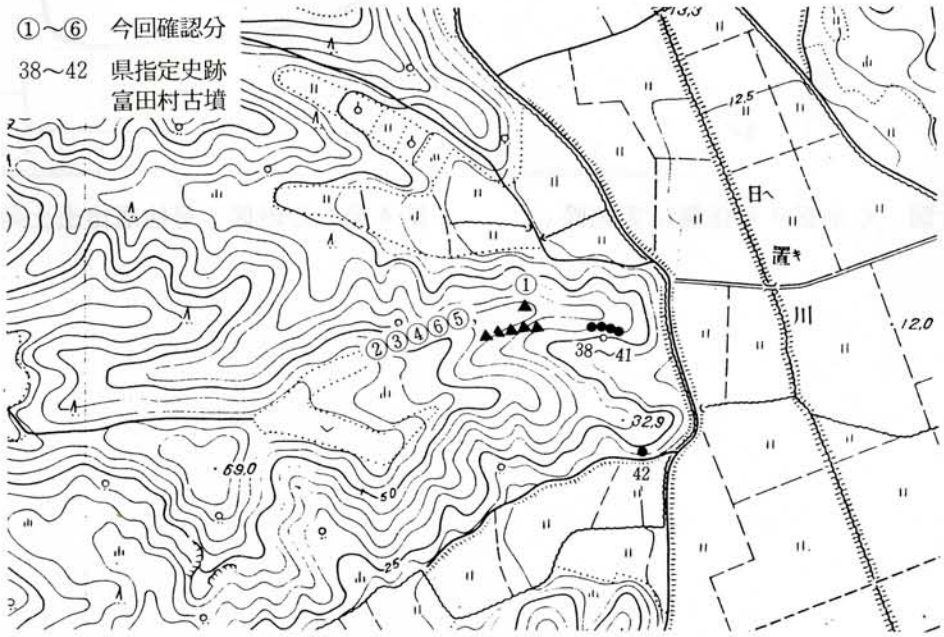
第2章　隅ケ迫横穴墓群

＜調査に至る経緯＞

平成2年9月6日、新富町大字日置隅ヶ迫の土砂採取工事中に、土器等の遺物の発見が町教委にもたらされ、早速現地に急行すると一基の横穴墓が露出した状態で確認された。現場作業員より事情を聴取した結果、工事の目的は所有者の依頼による埋め立て用土砂採取と整地であること、また、この他に破壊されたものはなかったとのことであった。これにあわせて、所有者にも確認をおこなった。この結果を宮崎県教育委員会文化課に連絡した。9月7日、現地において所有者、工事責任者、県教委、町教委の四者で協議した結果、当丘陵には、県指定史跡富田村古墳38～41号の4基の横穴墓が所在し、今後新たに未確認の横穴墓の存在が予想されるため確認調査を行うこととなった。調査は9月21日より11月28日までの間、おこなわれた。調査は、町教委が調査主体となり、県文化課より東　憲章主事の派遣を受け、町社会教育課主事有田と分担しておこなった。調査の結果、新たに5基の横穴墓が確認され、合計6基の確認となった。なお、調査終了後、土砂採取は中断中である。

＜立地と環境＞

隅ヶ迫横穴墓群は、古墳時代の注目される集落跡である上薗遺跡の所在する標高約70mの洪積台地から約600m東側に傾斜してのびる丘陵に造営された横穴墓で近くには、県指定史跡富田古墳38～42号墳の計5基の横穴墓が所在する。



第5図　隅ケ迫横穴墓群位置図（縮尺 1/5000）

＜調査の概要＞

今年度確認した遺跡は、調査対象となった約10,000㎡の丘陵のうち、約1,500㎡で横穴墓６基が確認された。号数は、谷奥部より２、３、４、６、５号と並び、５号の北側丘陵上部に反対側より開口した１号がある。

１号墓は、この丘陵の最高位に北向きに開口した横穴墓でこの横穴墓群確認の端緒となった土取り工事の際、バックフォーにより初めて開口したいわゆる処女墳と思われ、発見の際、工事関係者により一部が乱されたとはいえ副葬状態が特定される良好な横穴墓であった。

玄室は、羨道および細長い前庭部の主軸により西側に屈折し、片袖に近い妻入り型で奥行約280㎝、幅約260㎝、中心部の高さ130㎝を計る。板閉塞の掘り込みが羨門に残る。出土遺物には須恵器の坏身、坏蓋の完形品が多く、39点、土師器の坏身６点、坏蓋１点、ほか５点。鉄製刀子２点、鉄鏃７点、不明鉄製品１点、耳環４点が出土している。

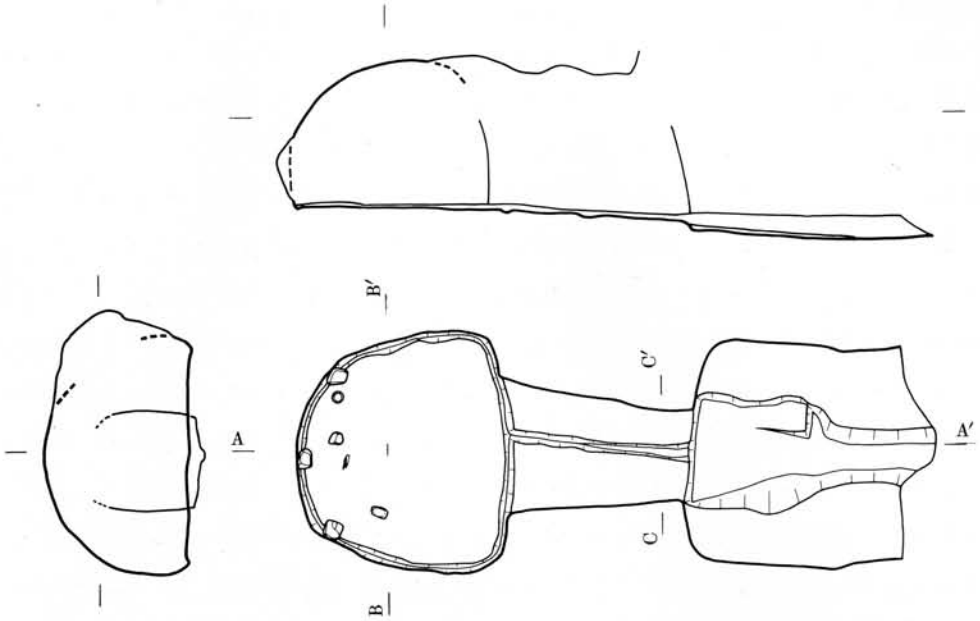
２号墓も１号墓同様、機械により天井部分を削りとられた状態での発見であった。玄室は、羨道および前庭部の主軸方向に奥にやや広がった卵型に掘られ、奥行約360㎝、最大幅約280㎝、中心部の高さ130㎝を計る。玄室内部は盗掘のためか人頭大の河原石も原位置をとどめていない。出土遺物には、鉄製刀子１点、鉄鏃１点、ほか奥壁に近い床面より円柱状の土製玉４点や須恵器片が出土している。人骨は、確認できなかったが、歯２点が出土。

３号墓の玄室は、隅丸方形を呈し、奥行約480㎝、中央部幅約400㎝、高さ184㎝を計る。羨道部は、幅126㎝、高さ128㎝を計る。この玄室奥壁下の河原石の上には、竹ベラが残されていた。また内部の石も動かされており、床面に貼りつき埋土に隠された状態で出土した須恵器坏身４のほかは小破片のみであった。盗掘の可能性大。その他の出土遺物に耳環８点、鉄製刀子２点、鉄鏃４点、鉄製刀の一部、不明鉄製品10点がある。

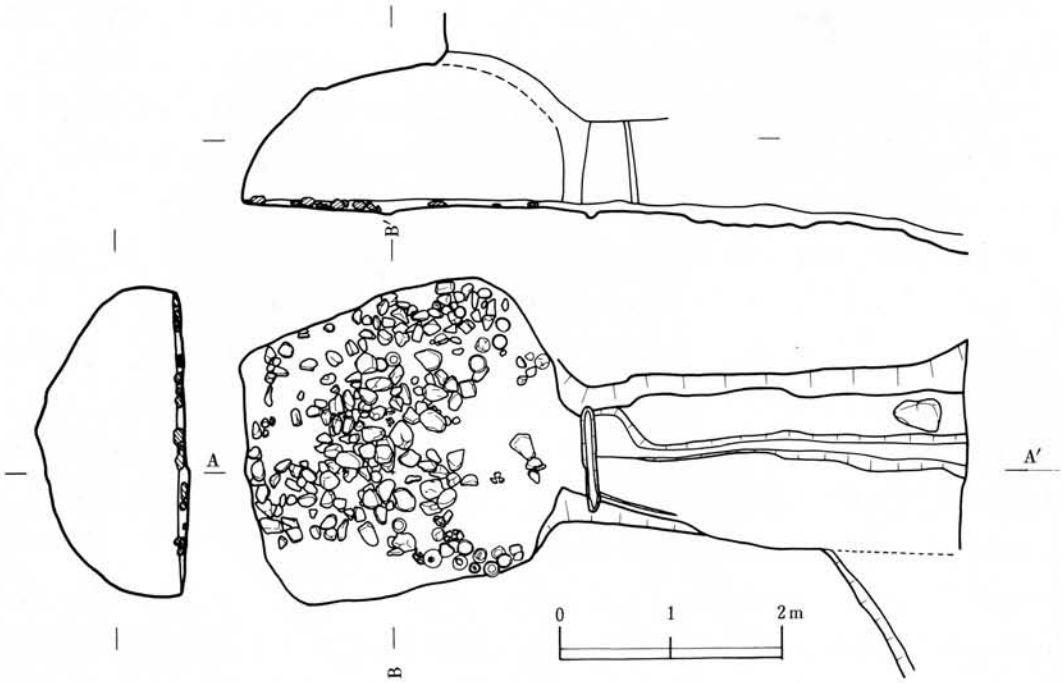
４号墓の玄室は、ほぼ方形を呈し、奥行約160㎝、中央部幅約192㎝、高さ72㎝を計る。羨道部は、幅78㎝、高さ74㎝を計る。出土遺物には、鉄製刀子１点、鉄鏃１点。

５号墓の玄室は、ほぼ長方形を呈し、奥行約460㎝、中央部幅約300㎝、高さ195㎝を計る。周囲に排水溝を設ける尖頭アーチ式の横穴墓。羨道部下部には河原石の閉塞石がよく残る。羨道部は、復元幅120㎝、高さ98㎝を計る。内部は乱されており、盗掘の可能性大。出土遺物には、羨道閉塞石の内側下部より長方形透かしをもつ有蓋高坏の身が出土していた。（現地で盗難）同じく土師器の椀１点。玄室内部から須恵器坏身２点、須恵器片３点出土。

６号墓は、４号と５号の間にあり、ほぼ台形となっており、入口側が広く、幅約200㎝、奥行約184㎝、高さ126㎝を計る。４号に次ぐ小さな横穴墓。出土遺物は、玄室内より、須恵器坏身１点、鉄鏃２点出土。



第6図　6号横穴墓実測図



第7図　1号横穴墓実測図

第3章　南原ベニガラ工房跡

＜調査に至る経緯＞

平成2年11月、新富町大字三納代字南原の土砂採取場において「大量の土器と赤色の土」が発見された。新富町教育委員会は業者と埋蔵文化財のとり扱いについて協議した結果、確認調査をすることになった。

調査は新富町教育委員会があたった。調査の結果、長方形の炭窯状遺構とベニガラ焼成土坑、褐鉄鉱の残滓置場が確認された。

＜立地と環境＞

本遺跡は新富町新富町大字三納代字南原に所在し、鬼付女川により大きく開析された三納代谷よりさらに新田原基地のある新田原台地を小さく開析した小谷のわずかにひろがる棚状の平坦面標高45mに立地する。

周辺の崖には、川南層群に近似する礫層と泥層の互層があり、酸化鉄の露頭があり、崖面よりの湧水があり、ベニガラ製造の立地としては良好なものがある。

＜調査の概要＞

炭窯状遺構は、長軸8.6m、幅1.65mで深さ約40～50cmで、上部については、削平されたものと思われる。

ベニガラ焼成窯については、長軸2.10m、幅1.10m、深さ約40cmで、埋土には赤色の砂質土および赤色粘質土があり、この中に「ほうろく鍋」の破片が相当数混入しており、炊き口等を明らかにするまでに至らなかった。

遺物は、褐鉄鉱の残滓とパンケース2箱にのぼる「ほうろく鍋」の破片があり、この中で「ほうろく鍋」については完形品はなく、復元口径約29.5cm器高3.4cmを測り、ほぼ垂直にたちあがる口縁部は2.4cmを計る。器形は中央部が外側に突レンズ状にふくらむ丸盆状である。焼成は良好で黄橙色を呈す。

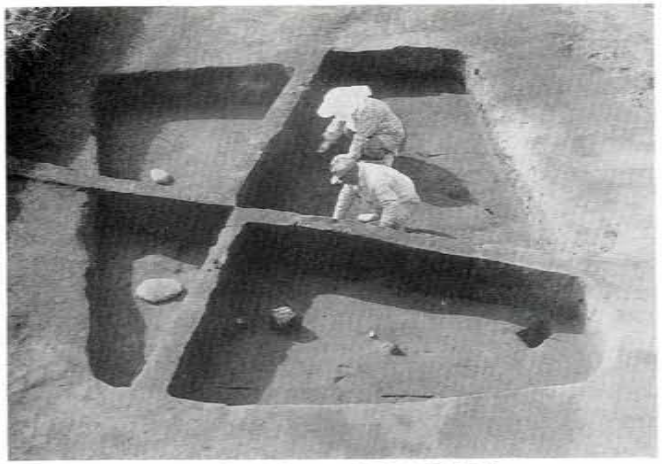
土器の内面には、赤色のベニガラが部分的に付着して一部にはその飛沫のためか、点状に広がる。陶器類が数点出土しているが、年代的資料としては薩摩系の小瓶がある。時期的には「ほうろく鍋」の年代観の不明さがあるが19世紀前後が考えられる。ほかの「ほうろく鍋」の破片も約30cm前後であろう。

尚、当地は藩政時代高鍋秋月藩に属しているが、管見のところベニガラ等の産業遺物は不明である。

また、当地には藩政時代より宮之首の集落があったが、地元にもベニガラに関する伝承は伝えられていない。

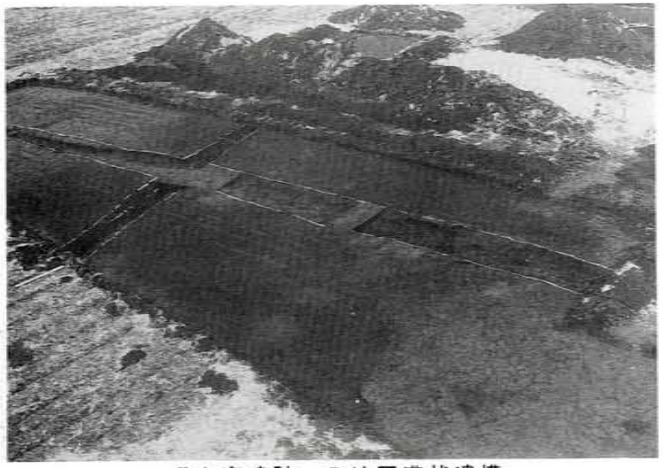
しかし、本町内大字三納代字弁指の河野宅（1890年上棟）柱等にベニガラと思われる顔料が塗り込められており地域内流通にかかるものの可能性もある。

湯之宮遺跡　A地区全景



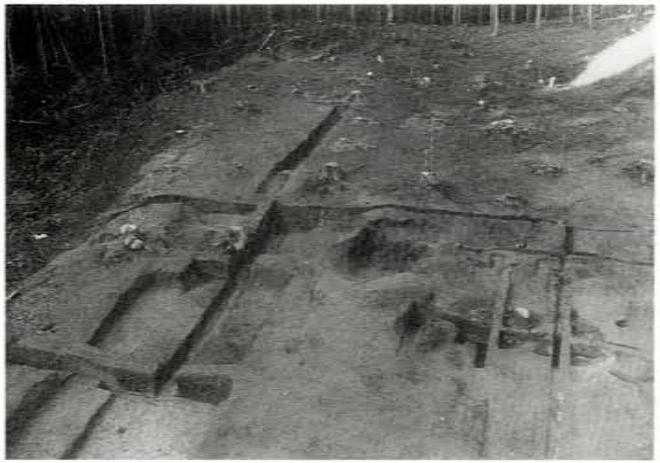
湯之宮遺跡　C地区1号住居

湯之宮遺跡　A地区1号土拡墓

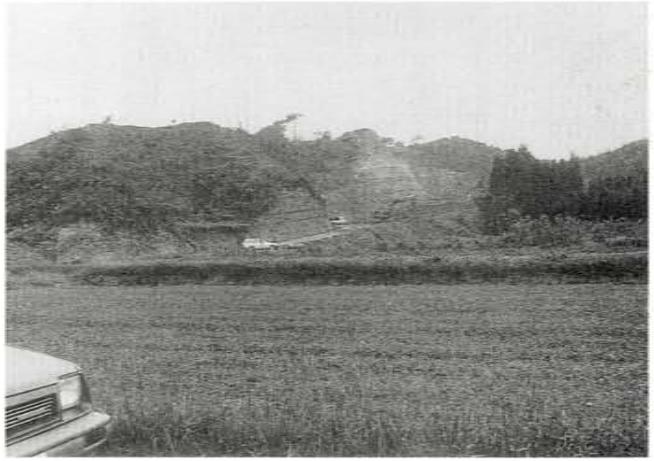


湯之宮遺跡　D地区溝状遺構

南原ベニガラ工房跡全景



左 炭ガマ？　右下 ベニガラ焼成窯



隅ケ迫横穴墓全景

2号横穴墓